

第 54 回(2011. 6. 23 配信)

雲竹齋先生の歴史文化講座 - 「中東・アラブ社会 (2)」

地理的より文化的な概念(アラブ)

新聞やテレビなどの報道で、「中東」もしくは「中近東」とか「アラブの国」あるいは「イスラムの国」などという表現が使われる。何がどう違うのかわからない人が多いようだが、こういったことが、中東問題を理解する上で、より複雑にしている大きな要因の一つであろう。イスラムの国とは、宗教がイスラム教を国教としている国であり、地理的にはアジアにもアフリカにも存在している。ただ、中東の国々はイスラム教を信じている人が多いので混乱しやすいのだろう。中東(中近東)とは、地理的な名称である。この地域には明確な線引きがなく、人により時と場合によって使い分けることが多い。

「アラブ」とは、「中東にあって、イスラム教が国教で、国語がアラビア語の国や人を指す言葉」である。したがって、アジアとかヨーロッパなどといった地理的な地域を指す言葉ではない。この定義からすれば、イランもトルコも地理的には中東地域に含まれているから、中東の一部であることには間違いのないのだが、イランはペルシャ語が国語であり、トルコも国語がアラビア語ではないから、「アラブ」という国の仲間ではない。しかし、単に「アラブ」といった場合は、時によってはアラブ社会を指す言葉だったり、アラブ民族を指す言葉だったり、あるいはアラブの文化を指す言葉だったりするから注意しなくてはならないが、新聞やテレビなどで「アラブ」という言葉が頻繁に使われているわりには、そのような基礎的な説明もなく、いきなり「アラブ」などというから混乱するのであろう。そうはいっても、アラブ民族そのものは、預言者ムハンマドがアラビア半島でイスラム教を布教し始めた7世紀頃とは、イスラム勢力が拡大されていく過程でかなり変化してきており、本来のアラブ民族の概念が変わってきて、現在ではアラブとは文化的な概念である、といった方がいいのかもしれない。

余談になるが、「湾岸」という言葉もよく聞かれるが、湾岸とは、ペルシャ湾沿岸の国をいう。中でも、サウジアラビア、クエート、カタール、アラブ首長国連邦、オマーンのアラブ 6 カ国で湾岸協力機構(GCC)を結成しているが、同じペルシャ湾岸のイランは加盟していない。イランはペルシャ民族だからアラブ諸国とは一線を画しているのであろう。日本ではこの湾をペルシャ湾と表記している。湾岸の片側をイラン(ペルシャ)が占めているが、もう片方はいくつかの国に接しているとはいえ、すべてそれはアラブの国々で、しかもアラビア半島だから、アラブ諸国からすれば「アラビア湾」と呼びたいと思っているわけで、実際にアラビア湾と呼んでいる文献もある。そういったアラブ対ペルシャの複雑な構造も頭の隅っこに入れておかななくてはいけない。ちなみに、このペルシャ湾は、大昔の地中海の「上の海」に対して「下の海」と呼ばれていた時期があったり、また「緑海」と呼ばれた時代もあったりした。

絵本のイラストに惑わされてはいけない

雲竹齋の友人のなかには「アラブ」を「ペルシャ」だといった者がいたが、そう思った原因は少年少女向けの『アラビアン・ナイト物語』の絵本や、ディズニーの映画などに出てくる宮殿とかモスクの絵などが、何となくペルシャ風に描かれているからに違いない。なかには登場人物や服装がトルコ風のイラストもある。また、かつて『ペルシャの市場にて』などのような歌が流行したことも影響しているのかもしれない。それに加え、石油を外国に頼っているわが国では、「ペルシャ湾」という言葉が新聞やテレビなどの報道で頻繁に使われるので、日本人には「ペルシャ」という言葉がお馴染みになっているから、そこで「アラブ」とか「アラビア」あるいは「中東」などといえば「ペルシャ」という

言葉を思い浮かべるのだろう。そこから、「アラブ」とはペルシャであり、風俗・習慣もペルシャ風だと理解しがちなのである。したがって、少年少女向けの絵本などのイラストを書く段になって、西洋の書物に掲載された古代のペルシャ風建造物や人物を描いたとしても決しておかしくはない。また、13世紀から第一次世界大戦まで、この地域を支配していたのはイスラム教オスマン・トルコ帝国だったこともあって、アラビア文化はトルコ風になっていったものも少なくない。そこからオスマン朝時代のトルコ風のイラストが描かれるのかもしれない。

中東地域は、7世紀にイスラム教が興って、シリアのダマスカスがイスラム帝国最初の首都となったが、その後、帝国の首都はイラクのバグダッドに移り、13世紀に興ったオスマン・トルコが中東一帯を統一していき、第一次世界大戦までコンスタンティノープル(現在のイスタンブール)が帝国の首都になった。他方、ペルシャ帝国も歴史が古く、中でも紀元前6世紀に興ったアケメネス朝ペルシャや3世紀のササン朝ペルシャ帝国などは有名で、日本の歴史教科書にも登場する。このペルシャ帝国は7世紀に興ったアラブ人によるイスラム帝国の支配下になったが、その後次第にペルシャ語が確立していき、特に10世紀以降イスラム文化を融合してペルシャ文化が発達してきた。イスラム帝国で爛熟したイスラムの文化は、ペルシャを通り、ペルシャ語に変わってシルクロードを經由し、中国から日本に伝わった。「バザール」とか「キャラバン」などの言葉が、日本では現在でも使われているが、このバザールという言葉はアラビア語の「スーク」がペルシャ語の「バザール」になって日本に伝わったもので、「キャラバン」も同様で、アラビア語では「イール」とか「キタール」などと呼ばれている。他方、ペルシャ経由でなくヨーロッパ経由で海路日本に伝えられた言葉には「アルコール」や「アルカリ」など、特に医学、科学用語に多くのアラビア語が現在でも使われている。そういうわけで、現代では人種的にも文化的にも、ペルシャやトルコとアラブは混同しているから完全に間違いだとはいいきれないところがあるのだが、こういった事情を説明しても、「ややこしいことをいうな!」と、怒鳴られる始末で、友人たちは真剣には聞いてくれないから情けなくなる。そして、この話をしたことをいつも後悔するのだ。

童謡『月の沙漠』は決してロマンチックな詩ではない

中東といえば、童謡の『月の沙漠』を連想する人も多い。この童謡はあまりにも有名で、千葉県御宿海岸には、ご丁寧にモラクダにまたがった王子と王女の銅像まで建っている。これでは誰だって夜の砂漠を簡単な衣装で旅ができると思ってしまう。女性の友人たちも口々に「いいなあ」を連発する。しかし、あれは決してロマンチックな話ではない。「あんな格好でいたら寒くて死んじゃう。だいたい王子と王女が二人っきりで旅なんぞするわけがない。護衛や御供はどうしたんだ。たぶん、あれは駆け落ちして自殺しに行くんだろう。きっと翌朝には凍え死んでいるだろうな」などといって、ロマンチックな雰囲気壊して嫌われている。ちなみに、童謡の歌詞は「砂漠」ではなく「沙漠」である。作者が海岸の砂から砂漠を連想し、そこから乾燥した「砂」ではなく「沙」という漢字をあてはめたのだといわれているが、きっと作者は本物の砂漠を見たことがないのかもしれない。まったく人騒がせなことである。

また、人里離れた砂漠の真ん中では、さぞ月や星がきれいだろうと想像して、行ってみたいという人も多いが、たしかに、極端に乾燥している中東の空は澄み切っているから、中東各地の大きな都市でも東京の何十倍もの星が頭上に輝いていて感動する。しかし、月や星を見ただけで町のホテルから見れば十分で、何も好き好んで砂漠の真ん中に行っても見る必要はない。砂漠あるいはその周辺地帯では、夜は非常に寒くなるからふだんの服装では凍え死んでしまう。砂漠では「放射冷却」による寒暖の差がはげしいからである。また、暑い日中は地中に潜っている毒蛇や毒サソリたちが、日没とともに一斉に出てきて攻撃してくる。もしも、刺されたり咬まれたりしたら、医療事情の悪いところだから一巻のお終りで、そうなればもう日本に帰国する航空便の手配をする労力や近所の人へのお土産の心配もいらなくなる。「やはり、千葉の御宿海岸で、うっとり妄想にふけるのがいい。もっとも、亭主や子供に見放された老婆が、前途を悲観して海に飛び込むんじゃないかと思わるかもしれないなあ」そうとどめを刺したものだから、大昔は夢見る少女だった友人た

ちから絶交状態が続いている。